二十歳のころ

加藤恭子ゼミナール 16 期 加藤・迫・山地

＜インタビューをした理由＞

私たちがインタビューをした理由は、以下の 2 点です。

1 点目はインタビューご協力者の方は、様々な業界で業績 1 位を維持する巨大 IT 企業に勤めています。また、企業を取り巻くビジネス環境に対応すべく、膨大なデータを読み取りや革新的なビジネスモデル・ビジネスプランの構築を行う、部署に所属しています。また、インタビューした方は多くの職種を経験しており、生い立ちや物事に対する幅広い思考に興味をもちました。

2 点目は、インタビュー対象者の方がゼミ生とお知り合いであることから、初対面では聞き出すことができないような奥深いお話までお聞きすることができると思いました。

上記の理由からインタビューさせていただきました。

＜インタビュー内容＞

Q：ご自身の MISSION は？

A：2017 年に転職してから意識していることは「**Try a lot・Small start・Check the result・Scale it**」の 4 つ。1 つ目の“Try a lot”は、たくさんのことに挑戦する。2 つ目の“Small start”は小規模に始めてみる。3 つ目の“Check the result”は結果を確認する。最後の“Scale it”はスケール(拡大または縮小)する。企業内で提案されるビジネスプランは数多であり、それは机上で悩み続けても何もわからない。そのため、できるだけ多くの企画を試してみる。企画は少しずつ始めてみる。その後、実行だけではなく、結果の確認をすること。最後に、データから企画ごとに拡大・縮小を行う。これを今も意識している。

Q：上に立つ人間として意識していることは？
A：「俺が上だからお前らが動け」では人は動かない。**動いてほしい人間のことをきちんと理解し、理解したうえで自分の発言は正しいのか、ここまで理解し伝える。**動いてくれない場合、相手のブロッカーは何かも理解する。**マネジメントにおいて、怒りで人を動かすのはナンセンス**。「やらない」のか「やれない」のかそれはなぜか。やらないのがモチベーションや意識の問題だったら、そこは改善しなければならない。やれないに関しては、どれだけ怒られても、どれだけやる気があってもできない。話を聞き、ここまで問題解決したらできるよね、というような状態にする。ここまで来たらやってもらわないと困る。いきなり 0 から 100 になるわけではないから、いつまでにやるか締め切りを絶対に作る。こまめな進捗確認と問題解決を行う。困難にぶつかったときに、どうすれば現状を打破できるのか、また、思考の仕方を意識づけさせることなど、脳の使い方を訓練させてあげる。これが成長するということ。

Q：二十歳の頃が今に繋がっていると思うことは？
A：自分でサークルを設立させたこと。コンセプトさえしっかりしてれば人は集まる。**行動力を学んだ**。当時は携帯が無かったから毎回人を集めるのが大変だった。ビラ配りが終わらないときには、時間帯が悪かったのか、場所が悪かったのか…改善策を考えた。行動すれば何かが返ってくる。怖いものは何もない。失敗しても失敗と思わない。うまくいかなくても失敗と思わない。**失敗は成功するまでの道のりでしかない**。

Q： 今、学生がするべきことは？
A：**4 年間の間に色々なことを経験・チャレンジするべき**。なんでも食わず嫌いはもったいない。 そして、頭の使い方や時間の使い方の質を上げてほしい。これは学歴とか関係ない。考え方にはコツがある。どのように頭を使うのか訓練する期間にすれば社会人になっても、必ず役立つ。

Q：人生の幸福度は？
A：常に HAPPIEST。大学生が終わるとき、今が自分のピークだ、と思っていた。だけど社会人って意外と面白い！今までは親に出してもらっていたお金とバイト代でやりくりして、その範囲で遊んでいたのが自分のお金で遊びに行って、いろんな人と 出会って幸せ。成長が楽しい。すべては繋がっていて、起こっていることは全て正しい。自分にとって最善の道が目の前に 開かれているような感じ。

＜インタビューを終えて＞

今回、二十歳のころのインタビューを終えて、インタビュー対象者の、思考の深さやマネジメントにおいて大事なことなどたくさんお話をきくことができました。そして、将来・先を生きすぎると、今を見失ってしまうこと。今を全力で生き、先のことを考える(自分を見つめなおす)時間を作ることで自身の成長に繋がるのだと感じました。

また、大学生の失敗などちっぽけなことや、今後自分たちが先輩という立場になった時、なにを意識すれば後輩たちがゼミ生活を充実できるのかなど、インタビュー対象者の経験から自分たちに置き換え、今後なにを成すことができるか。これをより実感し、考えることができました。今回の「二十歳のころ」の経験を自分たちの成長に活かしたいと思います。